会報 特攻
平成7年11月
第25号

〒105 東京都港区虎ノ門
3-6-8 第6森ビル
財団法人 特攻隊
戦没者慰霊平和祈念協会
電話 03(3432)1090
編集人 田中賢一
発行人 木村元正

第44回 世田谷特攻観音年次法要

9月23日

恒例年次法要は浅草寺一山式衆のもと行はれ、この日参集した者、来賓、御遺族、戦友合せて約四二〇名、厳粛盛大に行はれた。山主願文に続いて祭文奏上は内田副会長、遺族代表（古谷七郎）及び戦友代表（飯野伴七）の追悼の辞があって、その後トルコ大使館付武官ハッサン・ギュルゲン大佐の英霊に捧げる言葉があった。それは特攻隊員に対する尊崇の念と日露戦争以来トルコ国民の日本軍の精神を範としてきたことを述べ、最後に日本の現状に対する懸念を言外に含むような発言があり、我々もその通りと思った。

続いて恒例の献吟と海軍軍楽会ラッパ隊による儀仗が行はれた

戦友達の焼香

感懐

観音堂の　鐘を撞く
渾身の力をこめて
撞木が鐘に当る勢に
特攻機突入の思いがある

嫋々とした余韻は
神となった特攻隊員の清浄な心
鐘が鳴るのは今日だけではない
世田谷の杜から毎日世の中に
流れてゆく

杜の梢に　蟬の声を聞く
何年も地に潜み
世に出たら木のつゆを吸い
やがて死んでゆく
高潔な　その生涯
特攻隊員の心

観音様の姿　柔和なその容貌
ある写真に見た
出撃前の少年特攻隊員の顔を憶う
あの人達
そのとき既に観音様だったのか

手を合せて拝む　老兵の横顔
霜頭爛額　彫りが深い
あのとき死すべき命長らえて
瞬に友と会う　この庭で

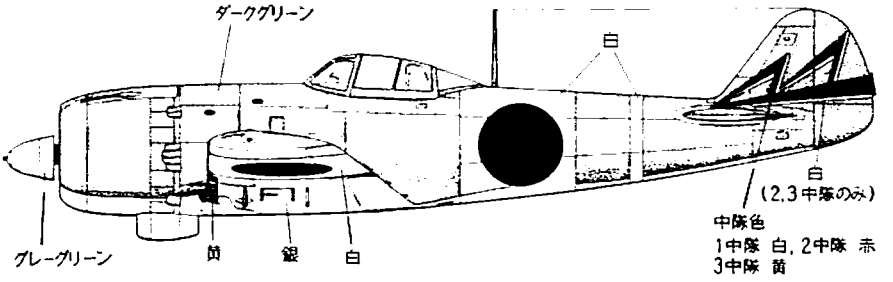
今回の絵画展は特攻戦死者の肖像画を主体に行はれた。出品者は伊藤直之、市川国雄、中野友次郎、松本武仁

目次

世田谷特攻観音年次法要……1
護天制空隊……2
「知覧特攻基地」より①……9
戦後五十年の国会決議……14
村山首相の式辞……15
榊原大尉と延岡高女生との物語……16
宝塚聖天英霊礼拝堂……18
空挺隊員の墓標……19
つばさの塔・原町戦没者慰霊祭……19
戦没者追悼式における
　天皇陛下のお言葉……20
八月十五日の靖國神社……20
天皇陛下護国神社に幣帛料奉納……23
我々の戦ったのは大東亜戦争だ……23
知覧における慰霊祭……24

池の中の観音

鐘堂



B29に体当り

震天制空隊

飛行第47戦隊

成増会　刈谷　正意　編

成増に在る間の防空戦闘

18年10月3日、独飛47中隊は飛行第47戦隊に改編され、東京西北郊に新設された成増飛行場へ移駐した。戦隊長には下山登中佐が発令され、翌19年1月飛行隊編制に改編した。この改編により、戦隊は飛行隊（長は戦隊長兼任）、整備隊（長　松本公男大尉、各中隊の整備班を統合）に二分され、従来の中隊編制は廃止されて、軍隊区分として適宜戦隊長が定めることになった。10月に交代した奥田戦隊長は、士気を高めるため飛行隊を三つに区分し、各中隊にそれぞれ旭隊、富士隊、桜隊の名を与えていた。

19年11月1日マリアナ基地のB—29が、初めて東京偵察に飛来した。この時47戦隊は、54機の2式単戦（うち20ミリ砲2門、13ミリ2門のⅡ型丙が5機、他は13ミリ4門のⅡ型乙）を保有し、17年いらいの猛訓練で、練度は相当高く、発令後戦隊全機の離陸完了まで3分15秒の記録を出した。一方、約280名の整備隊も試作1号機いらいのベテランぞろいで、常時87%の実動率をほこり、244戦隊と並んで関東地区防空戦隊の最精鋭と目されていた。しかし、この日の迎撃では、三鷹上空で旭隊の数機が、高度一〇、〇〇〇mで斜め前上方から、かろうじて一撃をかけただけに終わり、命中弾を与えた松崎中尉は、自機も被弾して着陸し、軽装備による体当たり攻撃を提唱した。

7日の迎撃戦も同様の結果に終わったので、第10飛行師団長は、隷下の各戦隊に体当たり専門の震天制空隊編成を命令した。47戦隊は鈴木、坂本曹長、永崎、見田伍長の4名を指名、カウリングと胴体中央を流れる真紅の太線で色どった体当たり機は、砲4門、防弾鋼板のほか、燃料タンクの防弾ゴムまでとり除き、200kg以上軽くなった2式単戦は、一一、〇〇〇m付近まで上昇することが可能となった。

11月24日B—29の本格的初空襲に当たり、戦隊は全力で出動、単機ずつの攻撃になったが、敢闘して2機撃墜、3機撃破の戦果を収め、B—29の撃墜も至難ではない、との確信を得た。うち1機は、東京上空体当たり第1号となった見田伍長の壮烈な肉弾によるものであった。

ついで12月3日、B—29は100機以上の大編隊で、中島飛行機工場を目標に来襲した。戦隊は、戦訓に基き、各個攻撃を避け、小隊（4機）ごとに一目標へ連続攻撃を集中することとし、斜め前方の浅い角度で、操縦席および翼付根付近を照準した。この戦法は成功し、撃墜5、撃破7の戦果を収め、全機無事帰還した。

年が明けて1月9日のB—29迎撃は、震天隊の出動による凄惨な体当たり戦となった。彼らは「ただいまより体当たり！バンザーイ」と別離の叫びを無線に乗せて、次々に突入して行った。すなわち幸満寿美軍曹は成増飛行場上空で、隊員注視のうちにB—29編隊の最左翼機に体当たりし、機体とともに四散して豊島付近に落下したが、左外方エンジンを吹き飛ばされたB—29は、黒煙を吐きつつ脱落し、真崎大尉編隊によって千葉県に撃墜された。この壮絶な体当たりの瞬間は、居あわせた朝日新聞写真班によって、フィルムに残された。また栗村尊准尉は、田無上空から銚子付近までB—29を追っ

て、体当たり散華し、この日の戦果は、撃墜5、撃破3であった。しかしその他の隊員は、過速に陥って衝突に失敗した。27日にも、鈴木精曹長が体当たり戦死をとげ、坂本勇曹長は、B－29尾翼への体当り後、牛込陸軍病院の庭に落下した。なお2月10日の迎撃戦では、B－29の撃墜3機、撃破5機の記録を持つ吉沢平吉中尉が、B－29に体当たりして散華した。

こうして1月末までの戦隊総合戦果は、B－29のみで撃墜19、撃破29機を数え、244戦隊と並んで、東日本防空戦隊の双璧となった。

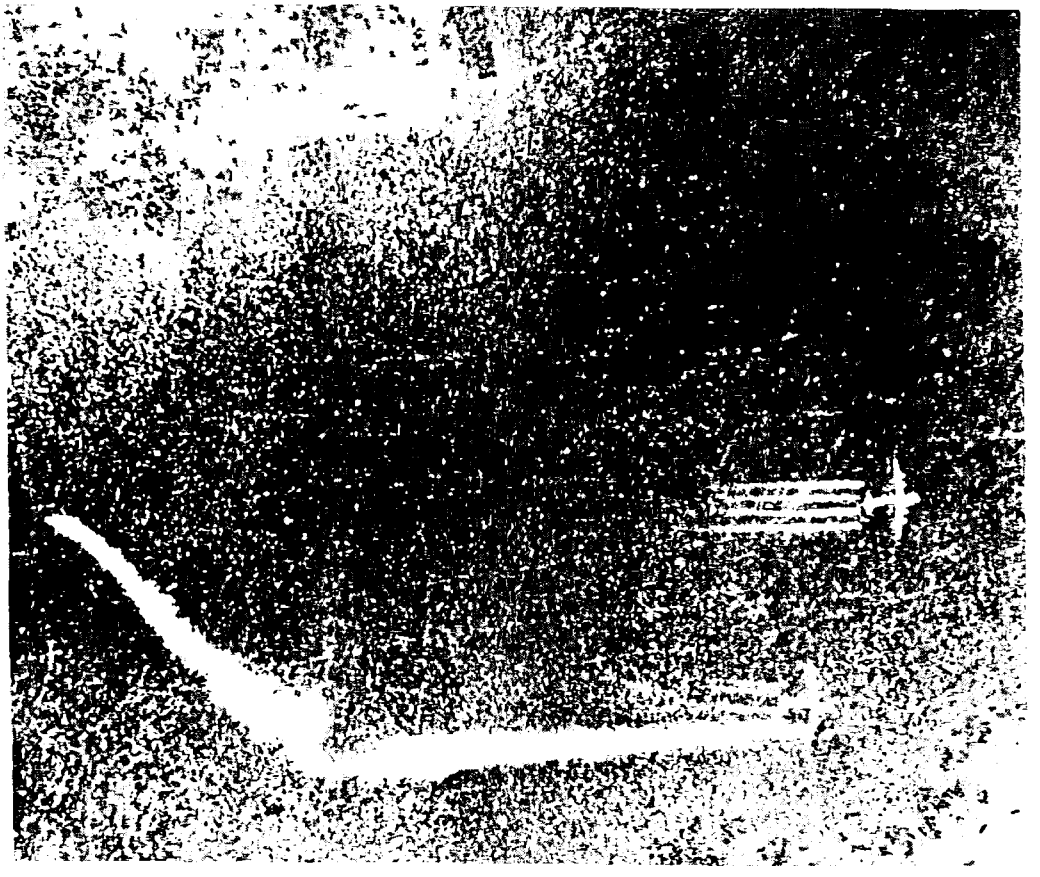
なお、19年12月から4式戦への機種改変が計画され、20年1月から防空戦の合い間を縫って、成増で未修教育を進め、2月中旬までに全機の改変（54機）を終わった。47戦隊はすぐれた整備力とあいまって、悪評の2式単戦を良く使いこなしていたが、4式戦になってから、故障や事故はさらに減少し、性能向上により、従来はB－29迎撃戦で、1撃が限度であったのを、2撃までかけられるようになった。

2月16日、米機動部隊艦載機群は、大挙して関東地区に来襲した。第10飛行師団の全戦闘戦隊は迎撃に飛び立ち、計62機撃墜の戦果を報じたが、わが方も、37機の自爆未帰還機を出した。47戦隊は戦隊本部と2個中隊（26機）が、太田上空でグラマン、艦爆の大編隊を優位から捕捉して空戦、F6F16機と、SB2C2機を撃墜した。

しかし翌17日、戦隊は迎撃戦を禁止され、6航軍、ついで第30戦闘飛行集団の指揮下に入り、敵機動部隊攻撃部隊に指定されて大阪の佐野飛行場に展開した。

幸満寿美軍曹

下の写真は体当りの瞬間を捉えたもの



大空を紅に彩って散った友よ！

刈谷正意

わが47戦隊の震天特攻隊員少飛12期見田伍長は、19年11月24日銚子沖上空でB－29に体当たり。関東地区撃墜第1号となった。明けて20年1月9日同特攻隊員幸満寿美軍曹は「こちら幸、只今より攻撃！」の一言を残し、部隊全員の見守る成増基地上空一万米の空で、B－29 11機編隊の最左翼機に壮烈な体当たりし、大空を紅蓮の炎に染めて散った。

同日、平壌の飛行第六聯隊頃からの友人粟村　尊准尉は、銚子沖上空で僚機の目の前で、逃れ去るB－29の尾翼に噛りつき馬乗りになってこれを撃墜した。その粟村は予て震天特攻隊には大反対だったし、乗機も機種改変したキ84「疾風」だった。

黒潮に描く鮮かな敵機の波紋。その紺碧の空に開いた純白の落下傘から、僚機の山家曹長に手を振る彼の姿。だがそこは、愚かにも救助船も配置してない距岸60kmの太平洋の真只中だった。

彼とはマレーのクアラベストから97式戦闘機に二人乗りで、ゴム林を掠めながらクァンタンまで飛んだ事もあった。痛惜限りない。

少飛13期佐藤多吉軍曹は1月27日、同29日には鈴木　精曹長がともに東京上空で体当りした。なかでも鈴木機は、無線器の故障で慌しく着陸し、「代機、代機を！」と絶叫しながら俺に要求した。「よし！　これで行くか」と俺は仕方なく重装備機を与えたのだったが、「特攻機の代機なぞ無いゾ」と断っていたら、彼は、敵弾で蜂の巣になった機体と共に小梅の沼に沈む事は無かったのに！。

56期吉沢平吉中尉は2月10日、呑竜様で名高い太田の中島飛行機を爆撃中のB－29の一機を撃破するや、躊躇なく続く一機に体当たりして撃墜した。傷つき空中に投げ出された彼は、ずたずたにされて切れた落下傘縛帯から離脱して落下した。吉祥寺の大宝禅寺には、戦後二人の姉様が建立された「勇魂碑」と飛行帽が残されている。

皆、気の良い奴等ばかりだった。「お国の為に」なぞと歯の浮くような構えは無い。そしてみんな淡々として悠久の大義のもとその若い命を国に捧げて散った。皆々、惜しい、愛すべき若者だった。

整備幹部の地上職柄、身近なパイロットが、空戦で次々と散ってゆくのを見ているのはつらい。若者達は莞爾として機上の人となり、まなじりを決して操縦桿を握ってレバーを入れた。その殉国の若人の命と引替えに得たものはなんであったか？「軍閥の走狗」の汚名ではなかったのか？　徒らに時流に迎合して巧者に身を処し、「私はこの戦に反対だったのだ」と高言し、或はその責任を天皇に帰して己の口を拭う。その人たちは、民族の死生興亡の関頭に立って、命をかけて敵に立向かって行った若者たちを、「只一途で無謀な、そして無益な衝動によるものだ」とでも言うのか。

今の日本の繁栄は、彼等の愛国の情熱をかけて守った国だからの姿ではないのか。

また今更ながらに、日本の航空技術・戦力が米国に敗れたつけを、これら若人たちの命と引き替えにした当事者の罪をも問いたい。排気タービン気密室、防弾、信頼性、生産性等すべて負けだったと認めざるを得ないのだ。

俺は年をとり過ぎたのだろうか？それで妙に涙脆くなったのだろうか？

いや違う。昔から『特攻隊』の言葉を耳にした途端、条件反射でか、ツ――と涙が溢れるのだ。

あれから50年。目ぶたの裏に、若いままの彼等の顔が微笑みかける。だが、ひとり静かに涙しながら冥福を祈るほか俺には応える術もない。

このたび生存隊員の成増会が終戦以来念願の呼掛けに応じた慰霊の碑が、今は「光が丘公園」となった滑走路脇に、「平和記念碑」として建立される段取りとなったのは喜ばしい。だが、副碑として詳細な彼等の帝都防衛の史実を後世に残すまで、俺たちの戦後はまだ終わらない。

（成増会代表・飛行第47戦隊整備指揮隊長）

47Fの二式戦

B29特攻に散った勇士を悼む

――私の特攻体験――

伴　了三

昭和十九年八月

満洲国錦州の第二十六教育飛行隊で九七戦の訓練が終わり、東京成増飛行場の飛行第四十七戦隊附きを発令された私と、疋野明、杉本信雄の三少尉は、敵潜水艦の潜む朝鮮海峡を渡って戦隊に着任した。八月初めのよく晴れた暑い日であった。此処では二式戦が轟音をあげて離陸している。こんな物凄いのに乗れるかなあ、と心配した。戦隊では満洲や比島から集まってきた幹候、特操、少飛の総勢二十四名をもって補習教育班を編成し、二式戦の未修教育を行い、進度に応じ逐次各中隊へ配属していった。戦隊の飛行隊は一中隊・旭隊、二中隊・富士隊、三中隊・桜隊で構成されていた。私は後に富士隊に配属された。

特攻隊の希望調査

十月のある日、空中勤務者全員は戦隊本部食堂に集合を命ぜられた。戦隊の幹部から直属の第十飛行師団長から命令が来たとしておおよそ次ぎの話しがあった。

「敵機の帝都空襲は間ぢかに迫っている。師団は初度空襲において体当たり攻撃を行い、敵に大打撃を与えて戦意を破砕する考えである。ついては特攻隊を熱望か、希望しないか、机上の紙に書いて密封提出せよ」

この頃はフィリッピン方面では陸海空の激戦が行われていたが、東京の私たちは対爆撃機戦闘の訓練をやっており、敵機に体当たり攻撃をするほど切迫した空気ではなかった。さて何か書かねばならない。私はいろいろと思い惑ってあげく最終的には熱望することにした。戦局からみて師団長が決心している以上どうしても誰か死なねばならぬ訳だ。下士官にやらせるのは気の毒だ、自分のような若い将校が率先やらねばなるまい。幸い兄弟はあるから父母の世話は大丈夫だ。こう考え及んで肚を決め、熱望と書いて提出した。

敵B29侵入、特攻隊編成

そうこうするうち、十一月一日、ついにB29が一機東京上空に侵入した。師団はこれを迎え撃ったが空しく逸した。つづいて五日に一機七日に二機やって来たが、わが方は捕捉できなかった。敵は投弾せず偵察らしく高高度を一航過し風の如く去った。われわれの戦闘機は敵の高度まで上昇できなかったのだ。

師団からは果然特攻隊編成の命令がくだった。二式戦から四門の機関銃と弾薬、背当ての防弾鋼板をおろし、重い酸素瓶二本は軽合金製の酸素発生装置に替える。こうして機体重量を軽くし高空まで上がってB29に体当たりして墜せ、というのである。戦隊初の特攻隊員は次ぎの四名が指名された。

富士隊鈴木精曹長、桜隊坂本勇曹長、富士隊見田義雄伍長、旭隊永崎隆良伍長。

俄然戦隊に緊張が高まった。しかし特攻隊に指名されても平素は各中隊に所属して、ともに編隊をくんで日常の訓練に励んでいた。

B29初の帝都大空襲

十一月二十四日。この日は昼まえから情報が入った。大型機大編隊が北上中という。いよいよ本格的空襲だ。われわれは早めに昼食を済ませて戦備を整えた。敵編隊が東京上空に達する少し前に、わが防空戦闘機が高度をとって待機できるよう、タイミングよく出動命令がでるのだ。やがて富士隊ピストのスピーカーが命令を伝える。

「特攻隊出動！」これに応じて鈴木曹長と見田伍長はレバーを入れて離陸する。続いて「富士隊全力出動！　帝都上空高高度」の命令と共にわが中隊十二機は一斉に動き出す。私は新参者ではあるが、第二小隊長吉沢平吉中尉（五六期）の僚機として出動した。戦隊の待機空域は八王子上空と定められており、この空域に達して間もなく敵機発見、攻撃位置へと占位して行った。高度は九〇〇〇mを越えていたと思う。我は敵より若干高位であった。私は十機ばかりの敵編隊の一機を攻撃したが有効弾を与えることは出来なかった。さらに第二撃をかけようと敵を追いかけたが、意外な高速でなかなか追いつけない。やっと千葉県上空で第二撃をかけたがこれも不十分。燃料が心配になって飛行場に帰還した。

中隊各機はばらばらになって帰って来たが、見田伍長がなかなか帰って来ない。心配していると戦隊本部から電話で、見田伍長は銚子沖三十粁まで敵を追いかけ体当たりで一機を撃墜し、自らも海上へ墜落した、という。これを聞いて一同はたちまち粛然となった。戦隊でただ一人の戦死者であった。

彼は年齢僅かに十九歳、少飛十二期の小柄で紅顔の美少年であった。訓練の合間にわれわれが庭球に興じていても、彼はひとり黙然と自分の飛行機の操縦席に座っていた。彼の強い任務への責任感と悲壮な決意を思うとき、暗涙を禁じえぬものがある。たまたま来

あわせた前隊長は呟いた。「見田は操縦がうまかった。演習では一機も壊さなかった。ただ一機壊したのは体当たりで戦死した時だった」

わが方の発表によれば、B29約七十機が来襲し田無の武蔵野工場を爆撃した。敵五機を撃墜した。しかし戦後にわかったアメリカ軍の記録によれば、撃墜は体当たりによる一機だけで、他の一機が海上に不時着した。

第10飛行師団が全力出動して、敵を撃墜したのはただ一人見田伍長（少尉）だけであったのだ。まさに身をもってする偉功である。

各戦隊特攻隊を二コ小隊にせよ

この日の夜、私は宮内にある将校宿泊所の自室で大森一樹少尉らとざる碁を打っていたところ、珍しく戦隊本部の同期の田中次男副官がやってきた。

「おい、師団から命令が来て、特攻攻撃は有効なり、各戦隊は特攻隊を二コ小隊（八機）つくれ、と言ってきたぞ」彼はそう言って暫く観戦して去っていった。この夜私は頭が冴えて寝つきがよくなかった。"彼はそれとなく知らせにきたのだ。二コ小隊ならば小隊長として将校が二人要る。そうなれば自分と杉本がなるに違いない。"渡辺糺と杉本信雄と私の三人が二式戦の未修を終わったばかりだが、つい先日渡辺少尉は離陸直後のエンジン故障で飛行場に帰ろうとしたが僅かに及ばず、飛行場周囲の壕の土盛りに激突し重傷を負い惜しくも殉職してしまった。残るは我々二人だ。

翌朝滑走路を横切って富士隊ピストに近づくと、果たせるかな私の飛行機に整備兵が群がって機関銃などをおろしている。この時の心情は誠に名状しがたい。機関銃がないのは実に情けない姿だ。もはや戦闘機ではなく単なる飛行機に過ぎない。これで死ねと言うのか。戦闘機操縦者のプライドもなにもあったものではない。

ピストに着くと吉沢中尉が、幸軍曹を呼んでくれ、と言う。下士官室に行って呼んでくると、お前もそこに並べ、と言う。私と幸軍曹は並んで中尉に敬礼をした。中尉はうつむき加減に、言い難くそうに低い声で言った。

「実はなあ俺がなりたかったんだが、お前ら二人が特攻隊になった。……」

つい最後の宣告だ。死の命令が伝達された。私は「はい」と答えたが、その声は喉に詰まったような声であった。幸軍曹は、「はい、やります」と明快に答えた。私は心の中で、彼の剛毅さに舌を巻くとともに、どうも自分は冷静ではあるが彼のようには出来ないな、と思った。私は自分の小隊の編成について知らされ、もう一人の小隊長は予想どおり杉本少尉であることも聞いた。私はこんな重要な命令は戦隊長自ら下達すべきだ、と伝達方法が内心いささか不満であった。

さて自分はいよいよ決定的に死なねばならぬことになった。これまでの死は観念的だが今度は現実に直面した。正直に言ってその日は食欲はなかった。命が惜しくて飯も食えない、と言われるのも悔しいからお茶をかけて流しこんだ。理性では特攻を承認するが、本能である生への執着を簡単に断ち切れるものではない。深夜ふと目覚めて己れの運命を哀れむ時もあった。結局は自分が犠牲となって、親兄弟をはじめ国民と国土を敵の蹂躙から守る事ができれば、自分の死も意義がある、と考えた。

死を決意すればこの世の中は誠に索漠とした別天地であった。喜怒哀楽は生への希望がある者だけのことで、私には感情の動きは少ない。同室の親しい友も別世界の人で、話しをするのも疎ましい。飛行機を操縦し射撃の訓練をするのも、自分は生きて敵をたおすこと、つまり自分を生かすため、であったことに思い至る。個体維持の本能を捨てると、飯を食べる楽しみも無くなった。さいごに如何にも残念であったのは自分に子どもが無いことであった。永い過去から連綿と継承され自分に及んだ生命の鎖が自分で断たれる。私の精神と肉体は伝える術もなく断絶する。私はすべての個人的欲望を諦めて死を決意し敵機の来襲を待った。

私はある日の出動のことを記憶している。敵来襲の情報があり、特攻隊は一番先に離陸するので自分の飛行に乗って待機していた。親友の五七期の大石正三少尉がわざわざ機側まで来てくれ翼の上に乗り、「おい、あまり無理するなよ」と話しかけた。私は既に決意しており、彼にお別れの挙手をして出動していった。この日は雲が厚く自分の技量では雲層突破は難しいと思ったが、あえてこれに挑み薄く見える太陽と計器をたよりに上昇していったが、あまり長くは続かず姿勢を失い急降下になった。しかし雲底の高度が五〇〇mもあったであろうか、姿勢を正す事ができた。きまりの悪い思いで着陸したが、結局誰も雲層を突破できなかったので恥をかかずに済んだ次第であった。

ところで意外にも特攻隊が編成替えとなり、二コ小隊は十機からなる一隊に変わり、私と杉本少尉は特攻隊員を免ぜられ、かわりに現役と特別志願の

将校二人が任命された。在任一ケ月ほど苦しい状況からあっけなく開放され普通の空中勤務者に帰ったのである。

昭和二十年一月九日の戦闘

この日も朝から情報がはいり敵大編隊が北上中という。午後一時ごろ戦隊全力出動となった。敵はB29約六十機が数梯団となって来襲した。私は例のとおり吉沢小隊長の僚機で出動し燃料ぎりぎりまで使って着陸したところ、機付兵が「幸軍曹殿が体当たりされました」と言う。ピストに帰って聞くと飛行場の上空で体当たりしたことがわかった。やがて特攻隊員の鈴木曹長が着陸し息せききって駆けてきて、隊長に報告した。

「粟村准尉殿が体当たりされました」

准尉は特攻隊ではないから一同信じがたい面持ちである。隊長「間違いないか」

「間違いありません。四式戦の尾部のマークが青でしたから確かに粟村准尉殿です。鈴木は今日こそ体当たりしようと銚子沖まで敵を追いかけて行きました。私の眼のまえで一機の四式戦がB29に後上方攻撃をかけていき、そのまま離脱せずに尾部に体当たりしました。マークは青でした。胴体の真ん中付近で折れ曲がりしばらくB29の背中に馬乗りになっていましたが、やがてB29が墜落して行くと離れて落ちて行きました。准尉殿は落下傘が開いて降下しましたが、体が動いており生きているように見えました」

わが戦隊は前年の十二月から四式戦に機種改変中で、准尉はすでに四式戦に乗っていた。また戦隊の飛行機の尾部には47を図案化したマークを、旭隊は青、富士隊は赤、桜隊は黄で描いてあった。従って青マークの四式戦は粟村准尉と特定できるわけだ。准尉は生きているらしいから一刻も早く救助せねば凍死してしまう。私たちは海軍による救助を切望したが、そのような音沙汰はなくそのうちに早くも日が暮れて絶望となった。

粟村准尉（中尉）は操縦技量は戦隊随一で上下の信頼の厚い貴重な人であった。射撃で墜せる腕前を持ちながら、あえて体当たりを断行したのであった。自室の私物は奇麗に整理され、一番上に飛行学校卒業のとき拝受した恩賜の銀時計を置いてあった。

幸満寿美軍曹（少尉）の体当たりは凄まじいものであった。「幸軍曹ただ今より体当たり！」と自から無線で報告し、十一機編隊の最左翼機に向かって対進攻撃をおこない、一番左のエンジンに激突して撃墜した。多くの都民が地上から目撃し写真に納めた人もあった。なみの技量や気力で出来ることではない。その行為は人々に大きな感動を呼び起こした。彼は私と一緒に特攻隊を命ぜられたが、私は途中で免ぜられた。奇しくも私と同郷で小学校は一級上、剛毅で快活な操縦者であった。

富士隊はこの日の戦闘で優秀な隊員を二人も失い寂寞の色は覆うべくもなかった。なお戦後のアメリカ側の資料によれば、B29の喪失は五機となっている。そのうちの二機が粟村、幸の両勇士の戦果である。

鈴木精曹長の苦悩

鈴木曹長は東北出身、短駆でがっしりした体格のひげの濃い実直な青年であった。前述したように初めからの特攻隊員である。ところが不運にも数度の空襲に出動しながらまだ体当たり出来ないでいた。さなきだに寡黙な彼は一層もの言わぬように見えた。私はその頃あたら優秀な操縦者を体当たりで失うことに疑問をもっていた。最初の空襲のころはわが戦闘機はB29の高度まで上昇できないので武装を卸し機体重量を軽くして高空まで上がり体当たりで撃墜するほか方法がなかった。しかし二十年に入ってからは、敵はわが防空戦闘機隊の戦力怖れるに足らずと判断したらしく、高度八五〇〇m程度で東京に侵入するようになった。だから戦闘機の射撃による有効な攻撃ができるようになった。私は体当たりなどの非常手段はもう止めるべきだと思っていた。上級司令部は空中勤務者の苦悩など考えず、惰性で特攻を続けているように思われた。

ある日ピストで夕食を済ませ営内宿舎へ向かい、暗くなった飛行場を肩を並べて歩きながら、私は思いきって鈴木曹長に話しかけた。

「鈴木曹長、敵は低くなったし射撃で落とせるからもう無理するなよ。」

「はあ……」彼は声にならぬ返事をした。私は婉曲に体当たりを思い止どまるよう言ったのだが、彼にとってはむしろ迷惑であったと思われる。軍隊における任務の重大さは誠実な彼の両肩にのしかかっていたと思われる。遂に彼も立派に任務を果たす時がきた。

一月二十七日の激戦

このB29の六コ編隊が陸続として東京に侵入してきた。総数七十二機であった。師団は全力でこれを迎え撃った。

鈴木曹長はこの日も出動した。離陸直後に無線機が故障したので急遽通常装備の予備機に乗りかえ離陸して行っ

た。彼は敵編隊の猛烈な砲火の中を正面から突進し編隊長機のトップを噛み砕いて、遂に散華した。その機体が小梅の小川から引き上げられたとき、エンジンはもとより脚の支柱にいたるまで敵弾で蜂の巣のようになっていた。

桜隊の特攻隊員坂本勇曹長は、熾烈な敵砲火を冒し後上方から敵機に迫り体当たりと同時に自機も被弾発火した。敵機は尾部を失って墜落、自らは無意識のうちに機外に放り出され、幸い落下傘が自然開傘して、重傷を負ったが奇跡的に一命をとりとめた。また旭隊佐藤多吉伍長は未帰還となった。洋上遠く敵を追撃し遂に戦死したものと思われる。少飛十三期の若者の孤独な最後である。

この日わが戦闘機隊はよく戦って戦果をあげた。敵の高度が低くなり、わが方も経験を積んだからである。アメリカ側の記録。第二十一爆撃兵団は九機喪失というかつてない最大の損害を受けた。日本航空部隊は九〇〇回以上の攻撃をかけ、体当たりもしばしばで……。こうした損害の多い出撃のため志気は急激に低下しはじめた。

わが富士隊も鈴木曹長（少尉）を失い、前年来四名の戦死で戦力は低下してきた。

二月十日のB29邀撃戦

この日午後、敵B29大編隊が北上中との情報が頻りであった。ピストの空気は俄然緊張した。この頃戦隊は二式戦から四式戦へ機種改変は終わっていた。私はいつもの通り第二小隊長吉沢中尉の僚機である。

「伴少尉僚機」と申告すると、微笑しながら中尉は、「今日はついてこいよ」

これまで空襲の度に僚機として上ったが、第一撃をかけると長機について行けず単機行動となるのが常であった。その時はこれを注意されたものと思った。見れば吉沢中尉は誰から貰ったか、首から小さなマスコット人形をぶら下げてにこにこしている。これまでの出動では無かった装いだ。

我々は出動命令と共にいつもの手順で編隊離陸して、かねて指定の空域へと向かっていった。ところが今日は様子が変わり、地上の戦隊本部から、「大田上空へ向かえ」と命令してきた。今日は大田の飛行機工場が目標らしい。編隊は大田に向かい高度九五〇〇mぐらいで水平飛行に移った。吉沢機が急に増速したので私もガス・レバーを一杯に入れたがどうしても引き離される。そのとき右前下方にB29の一編隊を発見した。吉沢機は敵を追い越して前方から攻撃する積もりだなと、思った。とうとう吉沢機は小さくなって見えなくなった。まもなく前方から猛烈な勢いで四式戦が攻撃してきた。私は吉沢機と思ったが確認はできなかった。私は敵編隊の腹の下に潜って、機首を上げて射撃したが敵からもエンジンを撃たれて付近の飛行場に不時着し、そこの直協機に乗せて貰って成増に帰った。まだ吉沢機は帰っていない。

間もなくして吉沢中尉は体当たりして戦死したことが地上からの報告でわかった。私はこれを聞いて耳を疑った。なんで体当たりしたのだろう。しかも私は出動の時注意されたのに長機について行けず、その最後も確認できない始末だ。誠に相済まないことであった。

吉沢中尉（少佐）はなぜ体当たりしたか？

よく考えてみるとかねて覚悟の決行であったと思う。中隊では前回の邀撃戦までに特攻隊員すべてが戦死している。吉沢中尉は私と幸軍曹をまえにして「俺が特攻隊になりたかった」と言った。彼は中隊の先任将校として率先して体当たりすべきだと思ったが、指名されなかった。そこで部下の特攻がすべて終わった時、彼は所信に従い部下の跡を追ったのだ。平素はなにも言わないのにこの日に限って、「今日はついてこいよ」と私に言ったのは、自分の最後を僚機にはっきり見届けさせようとの考えであったに違いない。私はそう信じている。

この戦闘が結果的にはB29との最後の戦闘となった。この後は戦隊の任務が替わり、対戦闘機戦闘が主となり、従って体当たりは自然消滅となった。

体当たりの勇士を悼む

体当たり攻撃を戦術として常用するなど軍隊指揮の邪道である。これを身をもって実行したのは前途ある青年たちであった。苦悩を内に秘め、任務のため敢然と自らの命を絶ったのだ。いっぽう多くの特攻指揮官は多数の部下を死地に投じながら自らは終戦になっても平然としていた。富永恭次しかり、菅原道大しかり。ただ海軍の宇垣纏、大西瀧次郎などの指揮官が立派に部下の跡を追っただけであった。

特攻は古今の歴史にその比を見ない一大悲劇であった。

四十七戦隊では、B29に体当たりして戦死したのはわが富士隊だけである。実に五名の優秀な青年が戦死した。回顧すればいまなお胸が痛むのである。

知覧高女なでしこ会編

「知覧特攻基地」より ①

この書物が如何なるものかを説明する代りに「まえがき」の冒頭部分を転載させてもらう。

〝昭和20年3月27日、知覧高等女学校の三年生進級を前にして、突然、私たちは勤労動員学生として、各地から知覧基地へ集結された特攻隊員の身の廻りのお世話をすることになりました。敗色濃い戦局だったために、軍だけでは隊員たちを受け入れるゆとりもなく、その態勢も整っていなかったのでしょうか。激しい空襲のさなかを自宅から基地まで、遠い人は二時間もかかって通い、三角兵舎の掃除、食事の用意、洗濯、そしてつくろいものなどの雑用係として、十四、五歳の少女だった私たちがあたることになったのです。最初一八名だった女学生も、手が足りなくなって次第に増員されるようになりました。

多くの隊員は到着して四、五日間を基地の三角兵舎ですごし出撃されましたが、なかには、たった一夜だけの滞在で慌しく出撃された方もおられました。それは、つかのまの出合いでしたが、長い年月を経た今でも心の奥底に多くの隊員たちの思出が生きつづけているのは、平和な時代には想像もできないような異常な戦争体験だったからでしょうか。泣きながら桜の小枝をうち振って出撃を見送ったときの光景が、折にふれ鮮烈な思出としてよみがえってまいります。

戦後三十三年が過ぎ（註本書の発刊は54年2月）、つらく悲しかった戦争の体験も、敗戦後の物資不足に悩まされた生活の苦しさも、忘却の彼方に押しやられようとしています。そして、いま私達が手にしている平和が、数多くの人生とかけがえのない青春の上に築かれていることを忘れ、権利ばかりを主張して責任を果さない風潮が一般的になりました。

こんなとき、平和を願い、すべての私情を断ちきって短い青春を終えていった特攻隊員を、その出発直前まで目のあたりにしてきた人々の中から「歴史の証言として何かを残すべきではないか」という声がもちあがりました。それも、何らかの作為のもとに粉飾されたり、無意識のうちに変ってしまったものではなく、その時、その状況の中で真剣に綴られた生のままを残したほうがよいのではないかということでした。……〟

このような趣旨で作られた三〇〇頁近い本書は、出撃して逝った特攻隊員の書き残したものや、当時の女生徒の日記など、まえがきにある通り何の粉飾のない珠玉の章篇で綴られている。

ここに編集代表者の了解を得たので、数回に分けてその一端を転載することにした。先ずは末尾に出ている本書を編集した人達の手記から。

復元された三角兵舎

女子勤労奉仕隊員の記録

知覧高等女学校三年　一五歳
特別攻撃隊担当
前田笙子

特攻日記

昭和二十年三月二十七日

作業準備をして学校へ行く。先生より突然特攻隊の給仕に行きますとのこと、びっくりして制服にきかへ兵舎まで歩いて行く。はじめて三角兵舎にきてどこもここも珍らしいものばかり、今日一日特攻隊の方々のお部屋の作り方。こんなせま苦しい所で生活なさるのだと思ったとき私達はぶくぶくした布団に休むのが恥づかしい位だった。わら布団に毛布だけ、そして狭い所に再びかへらぬお兄様方が明日の出撃の日を待って休まれるのだと思ふと感激で一杯だった。五時半かへる。

三月二十八日

今日は特攻隊の方のいらっしゃるお部屋へまはされたが、初めてのことと て恥づかしがつたり逃げたりしたが、自分の意気地のないことを恥ぢた。明日からはどしどし特攻隊のお兄様方のおしっしゃることをおききして、お洗濯やらお裁縫を一生懸命やらうと思ふ。

三月二十九日

朝お洗濯をして午後ちょっと兵舎の掃除をしたついでにおはなしを承る。大櫃中尉を隊長とする第三十振武隊の方々は若いお方々で、隊長さんの厳とした態度、私達には至つてやさしい隊長さん、部下の方々も実に隊長様になっいていらっしゃった。松林の中で楽しく高らかにうたをうたふ。

三月三十日

今日は出発なさるとのこと。朝早く神社の桜花をいただいて最後のお別れとして私達のマスコット人形とを差上げる。無邪気に喜ばれる。貨物(トラック)で飛行機のところまで行って食糧等を詰込んであげる。皆ほがらかに「元気で長生きするんだよ」と言はれて愛機に飛び乗られる。愛機には、さまざまなマスコット人形が今日の出撃をものがたるやうに風にゆれてゐる。出発なさったが天気の都合でかへられる。大変残念がっていらっしやった。

三月三十一日

今日は一日のんびりと特攻隊の方々と芝生でお話をする。全部の方々の住所をおききする。佐々木、池田兵長さん、地獄県三途川区三丁目草葉蔭とかかれる。

そして、女学校生活などお話ししてお兄様方の軍隊生活のお話もおききする。福家伍長様には私達と同年の妹様がいらっしゃるさうで妹さんのお話しもおききする。

四月一日

今日はお洗濯、掃除をした後皆でお話をする。十八歳の今井兵長さん、福家伍長さん二人で杉の皮をけづられ「伍長グラマン」(この頃は空襲がはげしく、グラマンの波状攻撃がつづいた。このグラマン機が発進するアメリカの空母を、まもなく伍長に昇進する今井兵長とともにやっつけてやる、という意味らしい)と書かれる。何時までも何時までもお二人のことを物語るやうに。そして妹さんに笑って出撃したと書いてくれとおたのみになる。血書をして私も一緒にとマスコット人形、髪の毛、爪を渡されたさうで、この立派なお兄さん、そしてこの立派な妹さんのことをお聞きして感泣する。

この日、岩脇さんと戦闘指揮所へ行く。

四月二日

今日出撃とのこと、横田少尉殿、襦袢のホックを付けてくれとお願ひされ一人兵舎に行くのもなんだか恥づかしく森さんと二人で行く。晴れの門出と言ふので横田少尉殿、チョビ髭をきれいにそっていらっしゃる。

午後三時半出撃……日の丸の旗を打ち振ってお送りしたが宮崎少尉機がすぐ引返して着陸なさる。続いて大櫃中尉機、次々へと……。宮崎機は「ウ、、、」と調子が悪く火を吐きさうになった。残念だったが、自分一人ならそのまま行くのだが整備兵を乗せてゐたので引き返していらっしゃったとのこと。隊長機(大櫃)は左右大へん振動がはげしく、福家機は爆弾を落してしまひ、後藤機故障でゆかれずして今日は隊長さん二度とも出撃出来得ず兵舎で一人歯ぎしりしていらっしゃった。

兵舎でみんなして特攻隊の方々と唄をうたふ。「夕日は落ちて」「校歌」。宮崎少尉さんより哲学のお話をおききしたけれども、よくのみこめないで頭がぼうっとなる。

敵が上陸したらどうするかといふ話を承る。私達も立派にお兄様方の後につづき日本の女性といふことを忘れず一人でも殺して死ぬつもりです。自分達は敵艦もろともなくなられる身ながら朗らかに談笑され、それに私達の将来のことまで心配され、いたづらに死んではいけないとさとされ、私達は只々頭が下るのみだった。

池田兵長さん唄ふ。

昔々その昔爺さんとばあさんがアッタトサ　ヨイヤサキタサ

爺さんは山へしばかりに　婆さんは川へ洗濯に　ヨイヤサキタサ
ドンブリゴッコ　ドンブリゴッコ流れくる　婆さんはそれを拾ひあげ　ヨイヤサキタサ

四月三日

今日は四回目の出撃、まさに四時であった。最後の基地知覧を後に大櫃機以下十機は遠い遠い南へと飛び去っていった。只一人病床にある河崎伍長さんを残して。出撃前、飛行機の擬装をとってあげると「こんなにお手々きたなくなるよ」と今井さん、皮のよごれた手袋を見せなさる。無理にお願ひしてとってあげる。横尾伍長さんたいへん喜んで「後に何も思ひ残すことはないが、只一つ病床に残した河崎のことが気にかかる」と。さうでせう、横尾さんと河崎さんとは本当に睦まじい戦友だったんですもの。自分は今日とは知れぬ身ながら病気の戦友を思ひやる横尾さん実に立派な方だと思ふ。部下の骨を背に出撃なさった隊長さんと言ひ、チョビ髭の横田少尉さんと言ひ、私達を妹の如く、又子の如くかはいがって下さったし私達は本当に幸福だったと思ふ。岩間さんの書置、何も出来得なかった私共にこんなにまでにお礼の言葉を戴いたと思ふと有難さで胸が一杯だった。

私達は只三十振武隊の方々が無事敵艦に体当りなさって立派に御大任をお果しにならんことをお祈りするのみです。

四月四日

病気の河崎さんと整備の方々だけでひっそりと兵舎はしてゐた。昨日まではああだった、かうだった、、とみんなで兵舎での思ひ出を繰返す。河崎さんの看病のかたはらちょっと警備中隊へ布団を取りに行く。新聞記者に捕まり特攻隊につかへての感想、感激、覚悟等話す。幾人もの新聞記者に取り巻かれほとほとした。

四月五日

特攻の方がいらっしゃらぬので整備の方々のお洗濯をこちらからお願ひしてやってあげる。終日飛行機と取り組み疲れていらっしゃるでせうと慰めてあげる。特攻機を無事に故障なく飛ばすのは整備の方なのだ。私達はこの御苦労をおさっしして毎日でもお洗濯してあげなくてはと思った。

四月六日

自分が整備された愛機はもう体当りしただらう、「今日は隊長殿の命日としてみんなで拝まう」と整備の方がおっしゃって森さんと私、たばこを一本もらってバラバラにして火にお香がはりにたいて拝む。遙か南の方へ……二、三日前までは元気でいらっしゃった方々が今は敵艦へ体当りなさってこの世へはいらっしゃらぬのだと思ふと仕事も手がつかず食事の準備をしただけ。

整備の方の吹く尺八をきいてゐると二十振武隊の方々が洗濯物をおたのみになる。初めからの受持ちだったのだが、兵舎が離れてゐて飛行機故障で残られた方が三人なので行きにくい。ついでに靴下のつくろひをと穴沢少尉さん三足おたのみになる。他の方が「自分のもの」と言ってつくろひ物で午後からは精一杯だった。

四月七日

今朝、食事の用意をしてゐると、どうも見馴れぬ方が四、五人あちこちなさるので「食事の準備ができました」と言って行くと、新しい方々だけだったので人違ひをして恥をかく。少尉の方だけで、隊長さんが陸士出身、実に立派な無口でしっかりしたお方の様で「今度きた方みんなお年を召した方だけね、あんな年を召した方でも特攻隊なんでせうか」とささやいたぐらゐ。みんな髭の濃い、年を召した様な感じだった。ひっそりしてゐた兵舎も又賑やかになる。

四月八日

本島さん、椿とつつじの花をくださる。今頃つつじの花がと皆で珍らしがって松の木にさす。これが枯れたら本島さんが出撃なさって体当りなさったときよと話し合ってさす。渡井さんより静岡の女学校で戴いたといふマスコットを戴く。

穴沢少尉さん曰く、「何時も貴方達は俺達の兵舎へきてくれぬ。何故だ。洗濯物だってあるんだよ」と連れて行かれる。行ってみると何んの用事なしでポカンとなった。大平少尉さん、穴沢少尉さんのお話に答へるだけ。雨が降ってゐて洗濯にいったままの姿できてしまったのでみんな素足、さんざん冷やかされて兵舎を飛び出す。

四月九日

今日はお洗濯、お掃除をして兵舎へ用ききに行く。河崎さんも近頃よくなって兵舎の外へも出られる様になった。洗濯のついでに整備の方の魚取りを見に行く。小泉さんと河崎さん土手から川へすってんころりん。危くぬれねずみになるところを木元さんが抱きとめる。電気で水中に火花をちらして取るのださうでピチピチ筒先から火花をちらすと一匹魚がぷっと白い腹をみせて浮かんだ。電圧が弱いため駄目で全部魚は逃げてしまった。福家兵長さんの妹さんへ最後を書いて出す。

四月十日

今朝中に仕事をすませて午後より慰問団の舞踊を見物に行く。池田隊長、岡安、本島、渡井さんと共に、早いので小高い畑に遊びに行く。「空から轟沈」のうたを高らかに唄ふ。無口な隊長さんまでが無邪気に唄はれる。隊長さん「この甘藍は巻くだらうか」と心配していぢられた。渡井さんは、「自分なんかキャベツと言ひますよ」と、岡安さんは「僕は玉菜と言ふよ」。はてさて隊長さん思はず部下の冗談には苦笑される。渡井さん何時の間にか国民学校四年生位の男の子を連れてくる。一人で何かブツブツ言ひ乍ら。隊長さん「どうもあの渡井にはかなはないよ」「おまへは特攻隊になりたいか」ときいたら、その子の言ふに「僕はなりたくない。長生きをしたい」と言ったそうだ。子供にやさしい隊長さん航空糧食をやると、受け取らうとした時大きな唐芋（さつまいも）がペタリ……茹でたてのほやほやがペシャンコになる。みんなして大笑ひ。そのとき自動車が来たので隊長さん一人で走って行かれたが、ガンガン（一斗缶）を山の様に積んだ自動車なので頭を掻き掻き登っていらっしゃる。又トラックが来る。本島さん「止めてくれ」の一声、踊り子をのせた自動車はピタリと止まる。それに乗って見に行く。しかし時間のため又すぐ帰る。みんな町へ外出なさる。

四月十一日

午前中、洗濯、縫物、掃除をすませて食事の後片づけも終へ、午後から同部隊の特攻機が五機つく筈なので迎へに行く。戦闘指揮所で隊長、本島、岡安、渡井さんと共に待つうち二機着陸する。隊長さんことのほかお喜び、二人の部下の方々も大変喜んでをられた。今から出撃までお世話になるからと挨拶をなさる。

「明日出撃だ。おまへたちもくる早々征くか」とおっしゃると「一緒に征きます」と元気な声でおっしゃる。

その晩、二十振武隊、六十九振武隊、三十振武隊のお別れの会が食堂であった。特別九時まで時間をもらって給仕をする。前に隊長さん住所を書いてやるから家に出撃したことを知らせてくれとお願ひされてゐたことを思ひつき、酔っていらっしゃったけど住所をおききする。酒臭い息を吹きかけながら優しく書いて下さる。

「空から轟沈」のうたを唄ふ。ありったけの声でうたったつもりだったが何故か声がつまって涙が溢れ出てきた。森さんと「出ませう」といって兵舎の外で思ふ存分泣いた。私達の涙は決して未練の涙ではなかったのです。明日は敵艦もろともなくなられる身ながら、今夜はにっこり笑って酔ひ戯れていらっしゃる姿を拝見したとき、ああこれでこそ日本は強いのだとあまりにも嬉しく有難い涙だったのです。

岡安さん、酔って自動車にぶらさがってお礼を言はれる。何んと立派な方々ばかりでせう。森さんとだき合って泣いた。

四月十二日

今日は晴れの出撃、征きて再び帰らぬ神鷲と私達をのせた自動車は誘導路を一目散に走り飛行機の待避させてあるところまで行く。途中「空から轟沈」の唄の絶え間はない。先生方と隊長機の擬装をとってあげる。腹に爆弾をかかへた隊長機のプロペラの回転はよかった。本島さんの飛行機もブンブンうなりをたててゐた。どこまで優しい隊長さんでせう。始動車（当時の飛行機は発進のときプロペラの回転が自動でできず、始動車によって始動した機が多かった）にのせて戦闘指揮所まで送られる。うしろを振り返れば可憐なレンゲの首飾りをした隊長さん、本島さん、飛行機にのって振り向いていらっしゃる。桜花に埋まった飛行機が通りすぎる。私達も差上げなくてはと思って兵舎へ走る。途中、自転車に乗った河崎さんと会ふ。

桜花をしっかり握り一生懸命馳けつけた時は出発線へ行ってしまひ、すでに滑走しやうとしてゐる所だ。遠いため走って行けぬのが残念だった。本島機が遅れて目の前を出発線へと行く。と隊長機が飛び立つ。つづいて岡安、柳生、持木機、九七戦は翼を左右に振りながら、どの機もどの機もにっこり笑った操縦者がちらっと見える。二十振武隊の穴沢機が目の前を行き過ぎる。一生懸命お別れのさくら花を振ると、にっこり笑った鉢巻姿の穴沢さんが何回と敬礼なさる。

パチリ……後を振り向くと映画の小父さんが私達をうつしてゐる。特攻機が全部出て行ってしまふとぼんやりたたずみ南の空を何時までも見てゐる自分だった。何時か目には涙が溢れ出てゐた。

何も話す気はせずみんなで帰らうとすると、本島、渡井さん、本島さんは男泣きに泣きながら……「どうしたの」とお聞きすると「今日ね、爆弾が落ちて行かれなかった。隊長さんの所へ行くと（本島、後からこいよ。俺はあの世で一足先に行って待ってるぞ）と言はれたんだ。思はず残念で隊長機の飛び去っていった後、一人で思ふ存分泣いた」とのこと。渡井さんも「本当にすみませんでした」と涙ぐんでい

らっしゃる。私達も今までこらへてゐた涙が一度にこみあげてみんなで泣いた。その夜、隊長さんのお通夜だと言って酒も飲まれず、今日いらっしゃった堀井さんが冗談をおっしゃっても只ぼんやりときいていらっしゃるだけだった。「本島、本島」と部下愛の深かった隊長さんを思ひ出すと泣けるから黙ってゐてくれとおっしゃる。

立派な隊長さんと一緒に体当り出来得ず又第二次総攻撃に参加出来なかったことが残念だったことでせう。

四月十三日

昨日いらっしゃった六十九振武の方々のお名前をお聞きする。副隊長の山下少尉、そして渡辺少尉、河村少尉、堀井少尉、中山少尉でいらっしゃるさうだ。いくらか本島さん、渡井さんも元気づかれた。みんなで隊長さんを恋しがっていらっしゃった。

四月十四日

今朝、食事の後片付けをしてから、書置、辞世をかいて戴く。帰りの自動車の中で敵撃滅のうたを唄ふ。夜空を仰いで亡くなられた方々を偲ぶ。誘導路を走ることしばし……途中整備の方々が飛行機に取り組んで整備に余念なく、機は青い火をふいて回転してゐた。本島さんはその方へいちいち敬礼される。整備の方へ有難うの感謝の敬礼をされる操縦者。又、一生懸命故障なく明日の出撃にそなへて徹夜まである整備の方々。私達はそれを目前に見て、これだからこそ日本の兵隊さんはえらいんだと思ふことだった。

四月十五日

明日の出撃にそなへて大変忙がしい。遺品のつつみかた、後片付け、お掃除等。本島さんよりお頼ひされてマスコット人形を二つ差上げる。明日は隊長の後を追ってあの世へ行けると大変喜んでいらっしゃった。本島少尉様は小さい時お母様を失はれた方ださうで、私にも母がないことを知って大変同情して下さった。「母なき後は母がほりとなってよき姉として強く生きるんだよ」と教へて下さった。慰問団くる。

四月十六日

今日はいよいよ出撃だ。朝四時、森さん迎へにくる。飛行場まで特攻隊の方と自動車に乗って行く。胸に殉職された方の遺骨を抱いて悲しい顔ひとつなさらず「男なら」「同期のさくら」のうたをうたっていらっしゃる。今朝に限ってどのうたも悲壮にきこえてならない。白鉢巻に白きマフラー、りりしい姿のお兄様方が戦闘指揮所前に並んでいらっしゃる。みな同じ服装で暗くてよくわからない。自分達の受持ちの方々を採してゐると本島さんひょっこり「おはやう」と声をかけられる。「六十九振武隊集合…!」と本島さん。皆集まられて最後の話にふけることしばし。本島さんは隊長さんに戴いた菊水の鉢巻をし、渡井さん、堀井さんはたすきをしていらっしゃる。散りかけた八重桜を差上げると大変喜ばれた。二つのマスコットのうち一つを愛機に、一つを飛行時計へぶらさげられたとのこと。自動車で出発線のところまで行かれる。渡辺さん見えなくなるまでハンカチを振られる。滑走をはじめた飛行機が次々と離陸する。東の空が少し白みかけるころだった。薄暗い中にもはっきりと「もとしま」と書いた飛行機が飛び立つ。「アッ本島さんだ」と思ふとすぐ「わたゐ」そして堀井機が飛ぶ。三機編隊をくんで飛んで行く。堀井機がものすごく低空をとぶ。思はず冷や汗が出る。最後までお送りして兵舎へ帰る。しかし何時までも何時までもぼんやりと考へこむ。日の出と共に最後の基地を飛び去って征かれた神鷲の御成功を祈りながら。今朝の感激を語り合ってゐると山下少尉一人帰っていらっしゃる。「すみませんでした」と紙片を渡される。五名（渡辺、堀井、渡井、中山、山下）の名が記されてある。これだけ五名ゆかれなかったんだ。さうすると征かれた方は本島さんと……河村さん……どんなことがあっても今日は征くと言っていらっしゃった御二人。午前九時半、本島、河村さん無事体当りなさった頃、南へ向かって黙たうを捧ぐ。今でも元気な声で「空から轟沈」を唄ふ本島さんの声が聞こえるやうだ。

四月十七日

敵襲で防空壕に退避する。三十一武揚隊のハセベ（長谷部）さんが御飯を食べずに逃げこんでくる。皆から弱虫だと言はれてプイと壕を飛び出して行ったが又「退避々々」で御飯を口に入れたままで、慌ててはいってくる。渡井さん「坊や又来たのか。御飯だけはゆっくり食べろよ」と言はれて出ていったが、敵機の爆音を聞いて又走り込んでくる。やっと三回目で食べ終へたとのこと。ほんとうに呆れてしまった。優しく女性見たいで坊ちゃんで育ったと言ふ渡辺さん、一度も退避なさらなかった。堀井さん、一度爆撃されて命拾ひしたから出撃までは大事な体故と通過しをへるまで退避していらっしゃった。壕の中でも一人ではしゃいで慰問団がきてをどったといふ「花は霧島……」ををどられる。手ぶり身ぶりの上手なこと、思はず先生方と吹き出す。二十振武隊のゐた兵舎に

寝ころんでゐると赤崎さんが「出撃だってよ」とはいってくる。びっくりして飛び起きていくと渡井さんが「早く死んだ方が幸福だよ。俺達の様な死にそこなひは苦労するよ。福岡辺まで行かねばならぬからね」とのこと。

近頃少し顔色もよくなった河崎さん、まだ目は黄色くしてだるそうにして来る。

「河崎さんも行くの、ときくと「ううん」といってゐる。本当に特別攻撃隊の御苦労が察せられた。夜先生の家へ渡井さん、堀井さん、河崎さん達と一緒に行く。トランプ等して楽しむ。

四月十八日

午前七時、知覧発の汽車で福岡へ行かれる。先生方と一緒にお見送りに行く。汽車が発車するまで「友ちゃんと新ちゃんは」と同期のさくらをうたって励ましてあげる。他の特攻隊の方々もうたはれた。四、五日したらすぐ帰っていらっしゃるとのこと、早く帰っていらっしゃいと慰めてあげる。河崎さんにも別れを告げて又渡井さんの所へ行くとすぐ列車は動き出した。列車が見えなくなるまでハンカチを打振る渡井さん、堀井さん、河崎さんのお顔が窓から小さく見えてゐた。

河崎さんの繃帯をお頼みされて兵舎へ持っていく。昨日飛行機で征かれた渡辺さん、中山さんのお帰りを待つのみ。兵舎は山下少尉と長谷部さんと整備の方がお一人だけ、山下さんも午後より福岡へ。今当分特攻隊の方々がいらっしゃらぬから明日から休みとのこと。

特攻勇士の像「とこしえに」

常軌を逸した戦後五十年の国会決議

与党三党は去る6月9日衆議院本会議で、五百万を超す反対署名請願を無視し、出席議員の過半数をもって次の決議文を強行採決した。

「歴史を教訓に平和への決意を新たにする決議」(戦後50年国会決議)全文

本院は、戦後五十年にあたり、全世界の戦没者及び戦争等による犠牲者に対し、追悼の誠を捧げる。

また、世界の近代史上における数々の植民地支配や侵略的行為に思いをいたし、我が国が過去に行ったこうした行為や他国民とくにアジアの諸国民に与えた苦痛を認識し、深い反省の念を表明する。

我々は、過去の戦争についての歴史観の相違を超え、歴史の教訓を謙虚に学び、平和な国際社会を築いていかなければならない。

本院は、日本国憲法の掲げる恒久平和の理念の下、世界の国々と手を携えて、人類共生の未来を切り開く決意をここに表明する。

右決議する。

抑々国会とは歴史を審判する処なのか、しかも議席の半数にも満たない出席議員の過半数をもってこのような決議をなすとは、僭越至極である。

この文面など論評にも価しない愚劣なものであるが敢えて申述べれば、植民地を支配し搾取したのは欧米各国である。英国の印度や馬来における所業、更にはアヘン戦争に見る支那侵略、オランダのインドネシヤ統治、スペイン、ついで米国のフィリピン支配、皆然りである。それと我が国の朝鮮・台湾領有と同一視する歴史の無知は笑止千万である。我が国では植民地と言はず外地と呼んだ。内地同様にしようと投資こそすれ、搾取したことはない。

昭和18年11月東亜各国の指導者が東京に集り、大東亜会議を開催した。そのときの宣言文を読んでみたことがあるのか、大東亜を米英等の桎梏より解放し対等の立場にしようとする高い理想を掲げ、侵略の意図など全くない。日本敗戦後東亜諸国の独立が実現し、彼等が感謝していることは、先般行はれ前号でも紹介したアジア共生の祭典に見る通りである。

決議文では歴史観の相違があると認めておきながら、何故それを画一化しようとするのか、論理は支離滅裂であ

り、歴史の教訓を謙虚に学びと言っているが、少しの謙虚さもない。

この国会決議に対する各新聞の論評は次の通りである。

朝日新聞〔6月11日社説〕泥を塗られた国会決議

▼恥ずかしい。悲しい。やり切れない。こうした形容詞をいくつ重ねても、足りない気持ちである。

戦後五十年の国会決議は九日夜に衆院で採択されたが、与野党の話し合いがつかぬまま新進党が全員欠席したほか、与党からも大勢が欠席し、賛成が議席の過半数に満たない異常な形になってしまった。

これが、戦後五十年にあたって国民を代表し、過去を反省して未来の平和を誓い合う、という国会決議のありようだろうか。せっかくの機会に、泥を塗られたような思いである。

読売新聞〔6月11日社説〕政略にまみれた「五十年国会決議」

▼なんとも異様な国会決議である。衆院本会議に出席したのは、全議員の半分そこそこ。出席者のうち、共産党は反対したため、「戦後五十年国会決議」は、衆議院議員全体の半数以下の賛成だけによる採択という結果となった。決議を受けて外務省は、各国に説明するよう各日本大使館に指示したという。決議文の説明以前に、採択の実態についての釈明の方に苦労するのではないか。

産経新聞〔6月11日主張〕五十年決議の荒涼たる風景

▼わたしたちは、国権の最高機関である国会が、過去の戦争に対する歴史的評価、それも道徳的判断を画一的に行うのは許されないと訴え続けてきた。議員間にも厳然として存在する歴史解釈の多様性を無視し、「国民の総意」と称して、特定の歴史観を「公定」するのは、本来、立法府の権能を超すからである。もともと不可能な歴史観の統一が、破たんを来たしたのは当然の結果である。

毎日新聞〔6月11日社説〕こんな醜態はまっぴらだ

▼つい先日、本欄で決議の内容について「とても合格点とはいえない」と辛い点を付けたが、今回の醜態で手続きまで不合格だったことをさらけ出してしまった。全世界注視の中での決議だけに、各国から物笑いになるのではないだろうか。

東京新聞〔6月11日社説〕強行採決の決議に何の意義が

▼国会の半分以下の意志しか反映されず、しかも強行採決という非民主的な手段によって採択された国会決議に何の意味があるのだろうか。（中略）歴史観の不一致と政治の堕落をあらためて浮彫りにする機会になってしまった。

各新聞の論評では言っていないが、更に大きな罪悪がひそんでいる。この決議文の根底には敗者を悪者とする東京裁判史観がある。満州事変以来二五〇万の英霊を侵略行為の実行者とでも言おうとするのが。このような考えを持ち、このような言辞を弄する者と我々は共に天を戴くことはできない思いである。更にまたこの決議が如何に国益を損ねるか、北鮮は飢餓を救う為供与した米を、過去の謝罪の為もらってくれと言ってきたと広言している。国恥決議が国恥をもたらし、国益を損ねること甚大である。最後にもう一つ、決議は日本歴史に重大な汚点を残し、子孫に自虐心を植えつけ、日本人としての誇を失はせることである。国家に与えた損失は一世一代にとどまらない。

戦没者追悼式における村山首相の式辞
それが戦没者に対する追悼の言葉か

新聞には全文が出ていないので、その前に何と言ったか知らないが、「あの戦は、多くの国々、とりわけアジアの諸国民に対して多くの苦しみと悲しみを与えた。私はこの事実を謙虚に受けとめ、深い反省とともに謹んで哀悼の意を表したい」と述べたという。

戦死者のみ霊に向って、お前らは悪いことをしたのだぞ、それだから俺は反省している、とは何たる言い分か。戦場になった近隣諸国の住民に悲しみを与えたことがないとは言はぬ。しかしこの式典は全国戦没者追悼式で万国戦没者ではない。アジア諸国の住民に追悼したかったら、別の席で勝手にやればよい。

もう一つ〝不戦の決意〟と言っているが、敵の侵略を受けたら直ちに降参せよというのか、存念をしかと聞き度いものである。殉国の英霊の精神に副はないこと甚だしい。

レイテ空挺作戦のタクロバン特攻で散った榊原大尉と延岡高女女生徒との物語

田中　賢一

挺進第四聯隊の榊原達哉中尉は、昭和18年6月18日、彼が計画指導した演習で、増水した小丸川（宮崎県児湯郡高鍋町）を渡渉させた為、押流されて八名溺死するという事故を起した。榊原中尉は責任を負って自決しようとしたが、聯隊長に戦場で必ず死ぬべきときがあると諭され思い留った。しかしその後も事あるごとにこの事故の件で思い悩むことが多かった。

それから約一年たった19年4月のある日、延岡に外出し一人で豊後屋旅館に一泊し酒を飲んだ。彼はすぐに赤くなり大して飲む方ではなかったが、一年前のことを思い酒でも飲まずにはいられなかったのかも知れぬ。直情径行の彼は酒の勢もあったのだらう、旅館の浴衣のままそこから程遠くない林医院に飛び込み、林院長に自殺の薬をくれと言うのである。驚いた院長が理由を尋ねると、小丸川事故のことを語り生きてはおれぬと言う。これを聞いた院長林松太郎は聯隊長同様死ぬべき機会は戦場に在ると懇々と諭し、彼も納得して引下った。

数日後榊原は陸軍中尉の軍服姿で林医院を尋ね先日の非礼を詫びるのであるが、その日は玄関先で辞去した。そして数日後数名の部下を引連れて訪問し、座敷に上って林家の家族と歓談した。部屋にピアノがあるのを見て、当時延岡高女一年生の娘公子にピアノを弾き歌ってくれとせがむ。そのときは歌うまでに至らなかったが、院長は電話で女学校の校長先生に、軍人達の為女生徒の歌を聞かせてやってくれるよう依頼した。

それから更に何日か後、榊原は数人の部下を引連れて女学校に現れピヤノを囲み数名の女生徒の歌に耳を傾けた。その歌は軍国調のものではなく、シューベルトの子守歌とか女学校の唱歌の本にあるもので、榊原達に日頃の激しい訓練を忘れさせ郷愁を誘うものであった。そのあと運動場でバスケットボールに打興し、その日は別れた。その後一行はもう一度女学校を訪問し、歌を唱いバスケットボールをやったりしたが、間もなく女生徒達が勤労動員で軍需工場に行ってしまい。このような付合いの場は再びおとずれなかった。

一方榊原たちの部隊は、敵がレイテに上陸した10月20日の直後、24日に第二挺進団に動員が下り、川南村の兵営を発ちルソン島に進出した。

戦争が終り延岡の女生徒達は、榊原をはじめ当時交歓を結んだ軍人達がレイテ空挺作戦で戦死したことは聞き及んでいたが、詳しいことは知る由もなかった。ところが、あるきっかけで榊原は特攻隊として出撃したことを知った。

レイテ空挺作戦は当初の計画では、挺進第三聯隊の主力をもってブラウエン地区の三つの飛行場を奪取して、脊稜山脈以東の平野部に対する攻勢の初動を掴もうとするものだった。ところが挺進第四聯隊が遅れてクラーク地区に到着し、第四聯隊も一部でよいから第一次挺進に使って欲しいという強い希望と、敵航空の跳梁を押え込む為には、東海岸のタクロバンとドラック両飛行場にも一部の兵力を降下させるべきだという意見とが相俟って、第四聯隊の一部を新な目標に向けることになった。ブラウエンに向う主力は山越えで進出する26師団と提携できると考えられていたが、一番遠い目標であるタクロバンには地上部隊の進出を初めから期待していなかった。そこでタクロバン降下部隊には輸送機僅か二機を充て、特攻隊ということで部署された。榊原はその指揮官を買って出たのである。彼は出征時は中尉で第一中隊の小隊長だったが、陸士55期だったのでルソン島に到着後大尉に進級した。そこで聯隊長は榊原を本部付とした。従ってタクロバン降下部隊の要員は新に人選したものか、彼が小隊長時代部下だった者なのか、それは判らないが、最も気心の合った者を連れて行ったと思うので、半年前延岡女学校に行った者も含まれていただらう。

榊原は小丸川で殉職した八人の位牌を胸に抱いて輸送機に乗込んで行ったが、それから先のことは全く判らない。ドラグとタクロバン降下部隊の空輸に任じたのは、挺進飛行第二戦隊の第一中隊（三浦中隊）の九機であるが、全機未帰還である。レイテ湾に群がる敵艦船の打上げも凄じい対空砲火に包まれ、喘ぐように単縦陣で飛行している姿を、ブラウエンに向つた挺進飛行第一戦隊の操縦者が目撃している。

以上のようなことを知って、かつて延岡高女の音楽教師だった池田たま先生（90歳）の呼かけによって、当時の女生徒藤原美々子・北国公子の両氏が紙芝居式のビデオを作成した。約20分の短いものであるが、榊原はじめ当時

接した将兵に対する追悼の真心と、このような史実を後世に語り伝えようとする気持が画面と解説に溢れており、感動を呼ぶものである。

【私（田中）とこの物語の関係】昭和19年頃私は陸軍挺進練習部付で教育訓練の企画等を担当していた。19年7月挺進練習部内に下士官候補者教育隊が臨時に編成され、私はその隊長を兼ねることになった。五個区隊に区分し、区隊長や助教は各挺進聯隊から差出すことになり、第四聯隊から出てきたのが榊原中尉だった。一年前に彼が小丸川で殉職者を出し自決しかかったことは知っていたが、それまで彼と深く接する機会はなかった。私のもとに来る直前に延岡でこのようなことがあったのは、五十年後の今日初めて知った。榊原は純情で教育熱心だったが我が強く、教育隊本部の係下士官と演習場の割当などで口論していることをよく見かけた。彼の部屋には次の歌が掲げてあった。

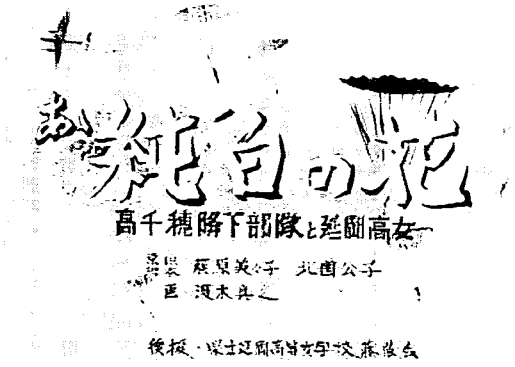
いつ行くかいつ散るのかは知らねども
今日のつとめに吾は励まん

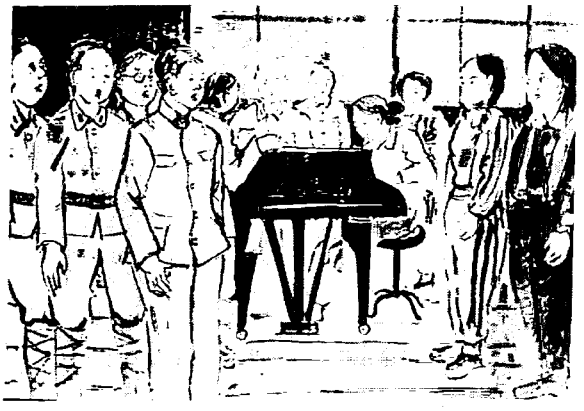
この歌は榊原が主唱して建てた小丸川殉職碑にも刻まれているので、私は貴様の作かと問うたところ、第四聯隊の誰かの作で自分は作者を知らぬと答えた。余談ながら別の人から私がその後聞いたところでは、小丸川で殉職した演習小隊長伊藤中尉の作らしいということだったが、私にそう教えてくれた人も20年になって戦死してしまうので、今は確めるすべはない。

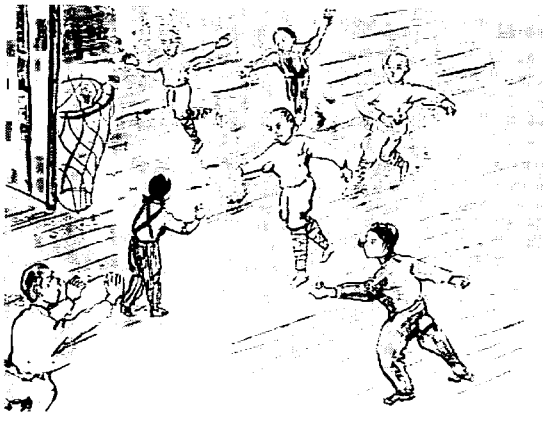
下士官候補者の集合教育は12月まで続ける予定だったが、10月24日に動員が下令され解散となった。あのとき三、四聯隊及び五聯隊（11月の改編で滑空歩兵一、二聯隊となる）から来ていた将校以下殆んど戦死し、戦後帰還を確認できたのは、当時の下士候の二名だけである。

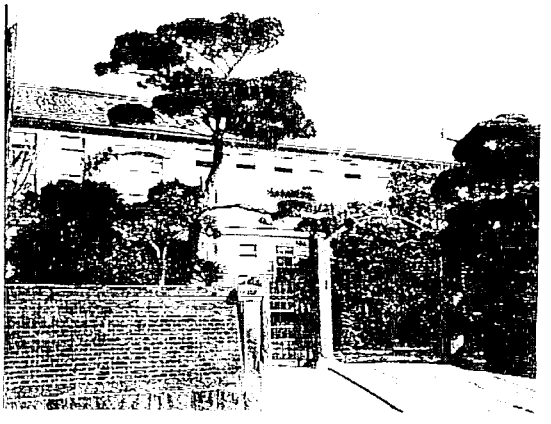
さて話は五十年後のことになる。前記の延岡高女の女生徒だった人達は、ある人が所持していた私の著書「高千穂降下部隊」（昭和50年原書房）を見る機会があり、私にも人を介して問合せがあり、私の知る限りのことを答えておいたが、このようなビデオを作るとは知らなかった。画中の人物とそれをこのような形で後世に遺そうとした人達の心情は、混濁の世を照す炬火を見る思いがする。

左の三点はビデオの画面、下の写真は当時の女学校の校舎、戦災で焼けて今はない。









宝塚聖天英霊礼拝堂

「大光明殿」縁起

兵庫県宝塚市梅町の「宝塚聖天」（真言宗了徳密院）に英霊礼拝堂「大光明殿」が建立されています。此の礼拝堂は写真のように堂上に、祖国の勝利を信じ青春を捧げ国に殉じた戦没者の象徴として、零式戦闘機が安置されています。何故このような礼拝堂がこの寺に建立されたのか、その縁起を述べて一人でも多くの礼拝者がお出になることを願います。

この礼拝堂は、宝塚に住む一人の信者K氏の寄進によって建立されました。K氏は少年の頃、生まれ故郷に特攻隊の飛行訓練場がありました。いよいよ明日は出撃！「鹿屋」に飛び立つ前夜の光景が、ありありと目の前に浮かぶのです。「おばちゃん行って来ます！」と云って、K氏の母親の手を両手で握りしめた少年兵の姿！目に一杯涙をためて、K氏の姉と握手して別れて行った少年の顔！目の丸鉢巻をシッカリとしめて操縦席に坐った雄々しい姿！それを見送る家族の人々の涙一杯の顔！あれから三十三年が経過しました。然し今尚はっきりと胸に浮かぶのは、英霊となられた人々の其の時の心であります。

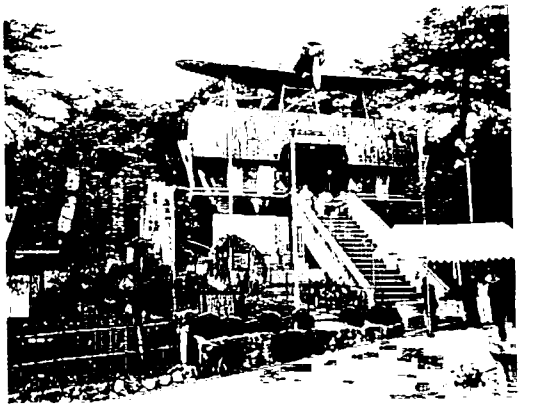
此の胸の痛みは、恰度同じ年頃となった我が子の顔を見るにつけ一層切実になって来ます。現在の世の中は坐っていて世界中の物が食べられます。テレビを見ていればパリの花も、ロンドンの川の流れも目の前に楽しむことが出来ます。然し一体、これは誰れのおかげなのか、私達に代って国の為にあえて何の疑いも持たずに戦死された方々を忘れてはならない。其の方々の英霊をお祭りしなければならない。慰霊せねば罰があたる。家でも国でも同じことではないか。K氏はそんな思いで一杯でした。そんな心境の時に宝塚聖天の住職と出会ったのであります。

宝塚聖天は、今から八十年程前に、日下義禅大僧生と宝塚市の名士、平塚嘉右エ門翁との二人の力に依って開創された寺であります。

日下義禅和尚は昭和9年6月15日、弘法大師降誕千百年記念に陸軍省に爆撃機を献納した人で、平塚嘉右エ門翁は宝塚ホテル、宝塚ゴルフ場等を創設して、阪急電鉄創立者小林一三氏と共に宝塚市生みの親として敬愛され、現在宝塚市建立の「平塚嘉右エ門翁頌徳碑」が宝塚聖天境内に建てられています。このような環境ですから、支那事変勃発するや直ちに、宝塚聖天隣接地に広々とした軍人墓地が開設されて堂々たる軍人のお墓がズラリとお祭りされています。

ところが、「お母ちゃん…あれ、誰のお墓なの？」と子供が聞くと、「アレはね、だまされて戦争で、死んだ人のお墓なのよ！」と。何という言葉でしょう。鉛の煮え湯を呑まされた気がしました。一体全体、今の世の中は、どうなっているのか。第一、これで戦死した人に対して、すむのか。遺族が聞いたらどんな気がするか、こんな母親に育てられて日本の国の将来は、一体どうなるのか。

唯々茫然とするばかりでしたと住職は嘆息しました。宝塚聖天の住職は毎月靖國神社に「月参り」をしています。靖國社頭の「英霊遺書」に非常に感銘し、是非宝塚軍人墓地にも此の「英霊遺書」の掲示板を設けて、一人でも多くの人々に読んで頂き度いと念願していました。こんな時にK氏に頼まれて「神さん」をお祭りにすることになりました。K氏と住職の胸中は一度に爆発したのであります。そして英霊礼拝堂建立の話が宝塚聖天信徒総代須藤真男氏に相談され、英霊礼拝堂「大光明殿」が茲に建立された次第です。須藤真男氏は平塚嘉ヱ門翁の御令孫であります。



「宝塚聖天」
阪神大震災にて倒壊寸前

阪神大震災により肝心の御本殿並びに付属建物の大きな梁までが引き裂かれ、柱は傾き大被害を受け目下四方よりの支柱にてかろうじて建っていて、近寄るのも危険な状況です。復旧には相当の費用を要するものと思われます。募金が行われます折には、皆様の絶大なご協力をお願い致します。

理事長　最上貞雄記

第18回宝塚慰霊祭

平成7年7月2日(日)　宝塚遺徳顕彰会主催による第18回宝塚慰霊祭が宝塚聖天「大光明殿」にて執り行われた。

全国各地より一〇〇名近くのご遺族が参集され、海軍予科練、陸軍特操、少飛等の方々が中心となり、陸海軍関係者約一五〇名、それに地元出身国会議員、県会議員、市会議員、市長、町長等を始め有志の方々、総勢三〇〇名近くの参拝者があった。

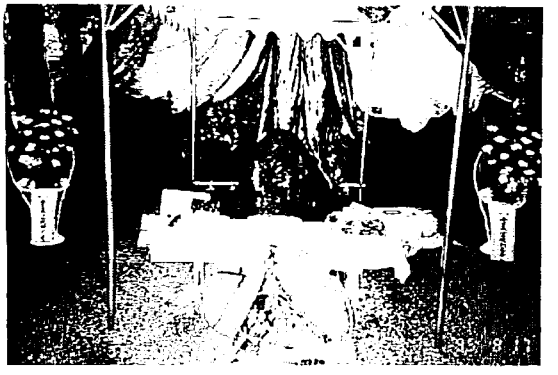
式は国旗、軍艦旗の掲揚に始まり各代表者の追悼の辞が奉読され、往時を偲び胸迫り嗚咽の声が漏れる中、厳粛盛大な慰霊祭を終了した。当会より最上理事長が代表して参列した。

空挺隊員の墓標
「空」の墓前祭

昭和31年和歌山県の高野山にこの墓を建てたときは、一万有余の戦死者の氏名を記載した霊爾簿を墓標の下に埋めた。そして毎年一回戦友が集い墓前祭を行っていたが、新旧空挺隊員を一丸とした「全日本空挺同志会」が結成されるに及び、同会が主催して祭典を行うことになり、新旧を問はず会員が死亡したとき遺族が申出れば分骨を納めることになった。本年の墓前祭は9月17日に行はれ、十一柱を合祀した。

当日戦友代表が墓前に捧げた歌

戦やんで　五十年
空の神兵と　謳はれし
眦高き　つわものも
怒りし肩も　すぼみたり
変らぬものは　亡き友の
瞼に浮かぶ　あの英姿
花負いて空たち征かん雲染めん
屍悔なく　散るという
あゝあの友と　別れして
烏兎匆々の　五十年
「空」の墓前に額つけば
高野の木の間に声聞こゆ
後に続くを　信ずると
富む春秋を　擁うちて
御楯となりし　我が友に
何と答えん　現世は
物は豊かに　満ち足れど
心　貧しき　世となりぬ
お国の為と　いうことの
絶えて久しき　世となりぬ
我等が力　足らずとも
遺烈伝えん　後の世に
共に抱きし　こゝろざし
などか忘れん　一老耄



墓前に供えてある落下傘
左は昔の四式、右は自衛隊の60式C

◇水戸つばさの塔慰霊祭

9月17日(日)第22回水戸つばさの塔の慰霊祭が執り行われた。今年は生憎12号台風が接近しその影響で強風大雨のため碑前にての慰霊祭は不可能となり一部代表者が参列、55期植草君の追悼の辞が捧げられ他の者は近くの町内会館で黙禱、追悼の辞も述べられ、慰霊の集いとなった。会長の木村栄作氏は体調不調の由、一日も早くご回復をお祈りする。奥様を始め地元婦人会の方々のお世話で大変和やかな直会となり散会した。

◇原町飛行場関係戦没者慰霊祭

9月24日(日)原町陣ケ崎公園墓地の慰霊碑前にて飛行場関係293柱、原町関係戦没者463名の慰霊祭が厳粛盛大に執り行われた。事務局長58期八牧通泰氏ご一家を捧げてのご奉仕でご遺族来賓を始め関係者300名を越す方々が参列、伊勢大御神宮司58期森鎮雄様の胸を打つ祝詞に始まり、原町市長、国会議員、福島県偕行会長、県遺族会会長、などから追悼の詞があり、更に原町メンネルコールによる合唱が捧げられ眞に胸を打ち目頭の熱くなるのを覚えた。終り近く台風14号の影響で雨となり合同写真は中止となったが、引続き有志の方々は松川浦に移動一泊、各種隠し芸も飛出し和やかな直会を幕を閉じた。

八月十五日　政府主催
戦没者追悼式における
天皇陛下のお言葉

本日、「戦没者を追悼し平和を祈念する日」に当たり、全国戦没者追悼式に臨み、さきの大戦において、尊い命を失った数多くの人々やその遺族を思い、深い悲しみを新たにいたします。

終戦以来すでに五十年、国民のたゆみない努力によって、今日の平和と繁栄が築き上げられましたが、苦難にみちた往時を思い、感慨は誠に尽きるところを知りません。

ここに歴史を顧み、戦争の惨禍が再び繰り返されぬことを切に願い、全国民とともに、戦陣に散り、戦禍にたおれた人々に対し、心から追悼の意を表し、世界の平和とわが国の発展を祈ります。

天皇、皇后両陛下には戦没者遺族への御心境を詠まれた和歌一首ずつを、八月八日「日本遺族会」に寄せられた。

天皇陛下

国がためのあまた逝きしを悼みつつ
平らけき世を願いあゆまむ

皇后陛下

いかばかり難かりにけむたづさえて
君ら歩みし五十年（いとせ）の道

会員の画伯達の活躍

大衆に物事を訴えるのに絵画を使うことは有効な手段である。特にテレビの普及によって一般に書物を読むことが少く、画面によって知識を吸収しようとする。若い者ほどその傾向が強い。そんなことに目をつけて我が会員の画伯達は、松本武仁氏を中心に事あることに靖國神社参道に御祭神に因む油絵を展示している。今回も8月15日を中心に三日間55点を展示した、出品者は市川国雄、伊藤直之、生田惇、中野友次郎、野副直行、松本武仁の六氏である。

八月十五日、炎天下に参拝に来る人は真の日本人であるが、子供を連れたある父親は終戦の日宮城の前で自決している参謀の絵（松本武仁画）を指し、小学生の息子に「この人は戦争に負けた責任を負って自殺したのだ」と説明していた。その父親は戦後生れの年輩とお見受けしたが、よい家庭教育が行はれていることと思い、感銘を覚えた。

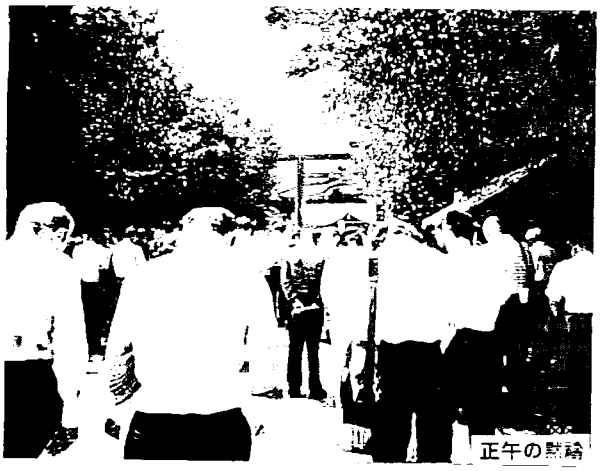
なお三日間に亘る絵の管理及び説明役に出た人は、市川国雄、伊藤直之、木村元正、安田義人、松本武仁の諸氏である。

八月十五日の靖國神社

この日も五十年前と同じように暑い暑い日だった。心ある国民は朝から続々と参拝におとずれ、正午には拝殿の前に溢れ放送を合図に黙禱を捧げた。

政府の要人達は何名かの閣僚が参拝したものの、村山総理、河野副総理らは姿をみせない。自分の国の戦死者に頭を下げぬ国の指導者など世界中とここにもいない。

英霊にこたえる会では第二十回全国戦没者慰霊大祭を行った。



正午の黙禱

英霊にこたえる会主催の祭典

祭文（前文と末尾省略）

まして、祖国日本の勝利と栄光を確信して、防人として散華なされた若き多くの英霊の御心中を拝察いたすとき、ただただ御無念、悲痛の声なき声の御叫びが、生き残された私共には聞え、お慰めする言葉を知りません。

この英霊の御心に応えるはずの、その祖国日本の国家・国民が戦後五十年迎った今日の姿は、何んたる醜態でありましょうか。総理大臣の靖國神社への参拝も絶えて久しく、加えて、今回の衆議院での売国的決議は、後に続くものあるを信じられて国家に殉ぜられた英霊の御心に背き、国の名誉も誇りをも傷つけるもので、遺憾にたえません。

しかしながら、このような憂うべき国情の中にあっても、心ある多くの国民は敢然として立ち上り、国会決議に反対する五百万余の請願、あるいは、日本民族の覚醒を促す運動の展開、また、今回の衆議院決議に対しても司法に訴え、その違法、無効を天下に問う行動を開始しました。

ここで改めて御奉告申し上げますこととして、天皇、皇后両陛下におかせられましては、昨年二月に硫黄島に行幸啓なされた折り

精根を　込め戦ひし　人未だ
地下に眠りて　島は悲しき

とお詠みになり、本年はすでに長崎、広島、沖縄、東京へと慰霊の旅にお出ましになられました。しかし、今上陛下が深い思召を抱かれておられることは、ここ靖國神社への御親拝であると御拝察申し上げます。

この大御心こそ大多数国民が熱願するところであり、政府はその実現に向い決断すべきであります。

私共は、今後にあっても御霊の尊い殉国の御心と、正しい史観を次代に継承いたすことをお誓い申し上げ、ここに本年もまた、先帝陛下が昭和六十一年八月十五日にお詠みになられた御製を奉唱して、祭文といたします。

この年のこの日にもまた靖國の
みやしろのことにうれひはふかし

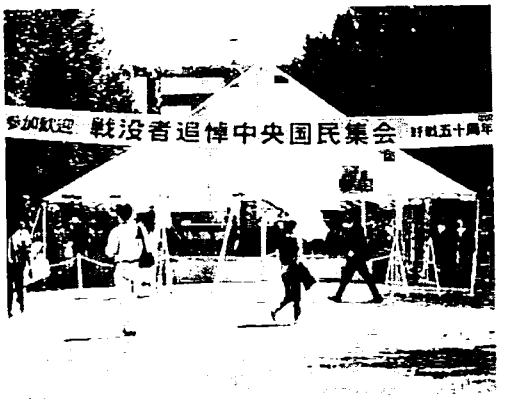
800人の参拝者拝殿に一杯

第九回戦没者追悼
中央国民集会

終戦五十周年国民委員会

八月十五日靖國神社参道に設けられた大天幕の中で行はれた。終戦の詔書玉音放送の録音を拝聴し、主催者代表の挨拶、各界代表の提言があり、正午の黙禱に続き、武道館における天皇陛下のお言葉を拝聴し、最後に次の声明文の発表があった。

聴衆は天幕の外の者も含めて3千人に及ぶ



（前略）

去る七月、天皇天后両陛下には、原爆投下の地、長崎、広島を、八月に入って激戦地、沖縄、加えて大空襲を被った東京を行幸啓になられ、八月八日には戦争遺族に対して、

国がためあまた逝きしを悼みつつ
平らけき世を願ひあゆまむ

の御製を発表され、戦争によって斃れた多くの人々の霊を慰められた。

我々はここに、天皇陛下の戦没者に寄せられる深い大御心に思いをいたすとともに、あらためて、祖国の自存自衛とアジア解放のため尊い生命を捧げられ、今日の平和と繁栄の礎となられた英霊に対し、衷心より追悼と感謝の誠を捧げるものである。

しかるに、本年六月九日、衆議院は、我が国の戦争を一方的に断罪する戦後五十年の決議を採択した。

かかる決議は、誤れる歴史観を国民に押しつけ、先人の血涙の歴史を冒瀆し、全国津々浦々から沸き起こった決議反対の国民の声を踏みにじる暴挙であることは、いまさら言うまでもない。しかもそれは自社連立政権の延命という党利党略のためのものであった。これを阻止出来なかった我々の非力を痛切に感じるとともに、靖國の社に鎮まる英霊に対して誠に慚愧に耐えない。

（中略）

加えて、憂慮に耐えないことに、終戦五十周年の意義ある日本、またも や、総理の靖國神社公式参拝が見送りとなった。国のためにかけがえのない生命を捧げられた英霊を祭る靖國神社に、総理や閣僚が国民を代表して参拝することは至極当然のことではないか。さきの戦後五十年決議にも謳われた戦歿者へ「追悼の誠を捧げる」の一節に、村山総理はいかなる意味を感じとっているのか。この点につき総理に猛省を促したい。

それ以上に切望してやまないのは、天皇陛下の靖國神社ご親拝の実現である。冒頭に述べたごとく、陛下の戦歿者に寄せられる御心の深きを拝察いたせば、終戦五十周年のこの年に、昭和五十年から二十年にわたって絶えて久しい、ご親拝実現の道を開くことこそ、政府の努めであると考える。

従来より多くの方々が主張してきた通り、占領軍が押しつけた東京裁判史観によって、戦後、我が国は、自己の歴史を蔑み、国難に殉じた英霊をないがしろにし、ともすれば近隣諸国への配慮と称して謝罪外交を続けて来た。

しかし、終戦五十周年の国民運動によって広まった謝罪決議に反対する五〇六万の請願署名や、全国四十七都道府県議会の過半数を越えた戦歿者への「追悼と感謝の決議」に示されているように、虚構の罪悪史観から決別し、自らの歴史観に立って、大東亜戦争の真実を次の世代に伝えようとする国民の声は、今新たなうねりとなって巻き起こっている。

ここに我々は、この度の終戦五十周年にかかわる国民運動に、協力と理解をいただいた多くの方々とともに、戦後、日本人の魂を蹂躙し続けてきた東京裁判史観からの完全なる脱却をめざし、この節目の年を新たなる出発として、国民運動のさらなる前進を心より誓う。

中央国民集会における主催者挨拶と三人の提言

主催者代表挨拶では、黛敏郎・同委員会副会長が「戦後五十年を迎えたが、今日も総理は姿を見せず、英霊への非礼が平然と続けられてゐる事態は変はらず、ますます悪くなってゐる」と語り、謝罪決議を「諸外国の要望としてでなく、我々の同胞から出てくるとは、亡国の兆しここに極まれる」と非難、島村文相の発言問題についても、「何故あのやうな質問が必要なのか。信念を持ってゐたら、答は同じ。それを予期し、わざと質問をし、問題にする。これはまさしく踏み絵」とのべた上で、「心静かに終戦の詔書を読み直し、陛下の御心を心とし、何をすべきか考えていかなければならない。そのために今日があり、未来がある」と静かに、力強く語った。

各界代表からの提言では、まづ埼玉大学教授の長谷川三千代氏が「東京裁判は国民と二百五十万の英霊総てにかぶせられた不当な裁判。五十年後の今もなほ力を持ち、増し続けてゐる」と訴え、「明るい戦後、いい時代と教えられてきたが、一度目を向ければ大変な屈辱が覆ってゐたのが目に入るはず。最も堪え難く忍び難きことは戦後におこったこと。靖國神社に参っても御霊安かれと祈る資格はない。戦後は五十年で終はらない。終はらせてはならない。冤罪が晴らされる時、初めて戦後が終はる。その日が必ず来ることを信じて力を尽くしていきたい」と語った。

続いて、戦時中にペリリュー島防衛のため日本兵として戦ったパラオ共和国政府顧問のイナボ・イナボ氏が「日本は戦争に負けたが目的では勝った」と、ヨーロッパの植民地だったアジアの国の独立について述べ、「日本の戦友は、戦争が終はり日本に来ることがあったら、靖國に来てくださいと言って死んでいき、今も忘れられない」と声を詰まらせた。そして、総理の参拝見送りや若者が参拝しないことなどは「自分の国のために命捧げた方たちなのに…」と厳しく批判、「日本が栄えているのも、その人たちのおかげ。一度でいいからお参りに来てください。来られないのなら、靖國神社の方向へ向かってお参りして下さい」と訴え、満場の大きな拍手を浴びた。

また、声楽家・元参議院議員の安西愛子氏は、昭和十八年に学徒出陣の歌「ああ紅の血は燃ゆる」を吹き込んだことを語り、歌を披露、「私たちが現存できるのは尊い、国を思ふ英霊の気持ちがあったればこそ」と感謝する一方で、戦後の教育や為政者への批判を加え、「今の若者はきちんと君が代を歌えない」ことも指摘し、「このままでは日本人は死んでも死にきれない気持ち。英霊が安心してお眠りになれるよう、皆がそれぞれの立場で努めなければ」と述べた。

終戦五十年にあたり 天皇陛下 全国の護国神社に 幣帛料を御奉納

天皇陛下には各都道府県の護国神社五十二社の終戦五十年臨時大祭斎行に際し、幣帛料を奉納せられることになり、去る七月五日全国護国神社会に伝達された。各護国神社では早いところでは八月上旬、遅いところでは十一月上旬に、それぞれ臨時大祭を斎行することになっており、本紙が会員の手元に届く頃は大方済んでいることであろう。

総理大臣は靖國神社の祭礼を無視しているが、各知事はどうしているのか。

我々の戦ったのは 大東亜戦争だ

我国の米英等相手に戦った今次大戦を、戦後一般に「大平洋戦争」と呼ぶが、これは間違いである。ビルマや支那大陸における作戦、果てはソ連の侵略に対する関東軍の防衛作戦などが何で太平洋なのか。それにもまして、この二つの名称の由来を尋ねれば、片方が誤りであることは明らかである。

対米英戦開始の四日後、12日の閣議で「今次ノ対米英戦争及今後情勢ノ推移ニ伴ヒ生起スルコトアルヘキ戦争ハ支那事変ヲモ含メ大東亜戦争ト呼称ス」と決定した。じ来この名称があらゆる公文書にも、また一般の報道にも使はれていた。ところが、我が国は敗戦によって連合国の占領統治下におかれ、「大東亜戦争」なる名称の使用を禁止するGHQ指令が日本政府に伝達された。これを受けた文部省は12月22日付次官通達をもって、地方長官、各学校長宛に「大東亜戦争」等の用語を授業に於て使用しないように指導した。一方GHQは出版、報道に関しGHQ民間情報局の検閲を受けることを義務づけるとともに、「大東亜戦争」「大東亜共栄圏」「八紘一宇」「英霊」等の戦時用語の使用を避けるよう指令した。これらは彼等の日本無力化政策の一環であることは歴然としている。

我が国が独立を回復した後もマッカーサーの指令が生きているとは、東京裁判史観の残滓と見るのは僻目か。

知覧における慰霊祭

平成7年の知覧特攻慰霊祭は、平和の鐘（特攻平和会館前広場）除墓式、今年で6回目を迎える平和スピーチコンテストと併せて、8月15日に変更して行われた。9時半から町主催の戦後50年記念式典が、観音堂に隣接する町民会館で行われ、後段に全国八百余名の応募者から選ばれた、高校生4人、一般人3人のスピーチコンテストが開催され、全国への平和の希いの発進基地としての、知覧町の意気込が窺われた。

慰霊祭の開式に先立ち、海自鹿屋基地からピーチクラフト機が、松山からはセスナ機（小山　進氏操縦、少飛出身）が飛来、小山機から野球場グランドに投下された花束が、観音堂に捧げられて13時30分に開式された。

炎天下、旧盆のさ中であったのに拘わらず、全国から御遺族三三七名、戦友等関係者四七九名を含め、出席者は一三〇〇人の多きに達し、終戦50年節目の年に相応しい厳粛且つ盛大な式典となった。

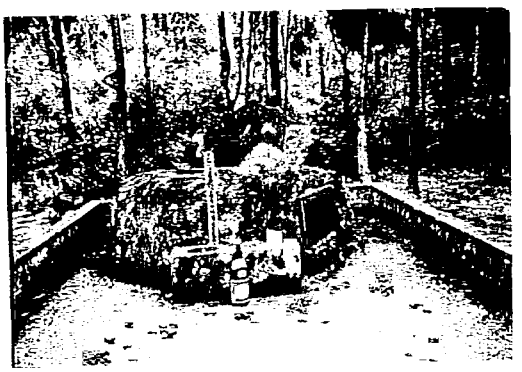
今年は誠第41飛行隊朴東薫（大河正明）少尉（少飛15期）の令弟朴尚薫氏夫人、趙恵郷さんと三女の朴桂弘さんの御二方が参列された。一般には未だしこりが消えない両国の関係であるが、この様な形で、わだかまりを超えた交流が出来ることは、誠に喜ばしいことである。

開式時に、陸上自衛隊国分第13普通科連隊儀仗隊が堂前に進み、捧げ銃を行ない、僧侶の読経下町長以下関係者の焼香、慰霊、追悼の言葉が慰霊顕彰会長である町長以下例年通り関係諸団体から捧げられた。再び軍楽隊の奏楽下に参列者全員が献花し、海行かば、加藤隼戦闘隊、同期の桜の大合唱を捧げて、15時過ぎに滞りなく式は終了した。

引続いて平和の鐘の除幕式が行われ地元の高校、中学、小学の3組の生徒達の手によって、初突きが行われ、妙なる鐘の音は、余韻を引いて嘗ての飛行場跡に響き渡って行った。半世紀を経過して、参列者一同、感慨一入新たなるものがあったことであろう。

慰霊行事は町の最重要行事として位置づけられていて、完全に地域社会に定着している様に見受けられる。10年、20年先に、戦友等直接関係者の出席が見られなくなることは、世の定めとして止むを得ないことであるが、御遺族の中には、小学校低学年を含めて、若い世代の方々が見受けられた。自衛隊員も、次世代を担う若者である。特攻平和会館の入場者も、六百万人を超えたそうである。特攻隊員によって具現された、日本人の心・魂が、知覧の地を核として、末永く日本国民に継承されて行くことを、心から希って止まない。

式終了後有志数十名はかつて飛行場側にあった三角兵舎の跡に建立されている慰霊碑に参拝、当時この地で特攻隊員の身の廻りを世話された知覧高女三年生（なでしこ会）が、今もって集い酒肴を準備して下さり、又当時愛唱した特攻隊にまつわる歌を合唱して往時を偲びご冥福を祈った。



三角兵舎跡の碑

なでしこ会の人々